

科目名	大阪落語への招待	単位数	2	授業形態	講義	担当 教員	久堀 裕朗 (文)
英語表記	Introduction to Osaka Rakugo						桂 春之輔 (文 客員)

● 科目の主題

江戸時代、商都として栄えた大阪は、多くの新しい文化を生み出し、育んだが、その中の一つに落語をあげることができる。落語は、16世紀末の安土桃山時代、大名の側近にあって咄相手や講釈をした御伽衆の営為に端を発し、直接には17世紀後半、京都・大阪・江戸で辻咄をする商業的落語家が登場し、その芸が発達を遂げたものである。江戸後期には寄席での興行が始まり、近代にかけて大阪・江戸（東京）を中心に最盛期を迎えた。当初は単に「はなし」と呼ばれ、その後「軽口・軽口ばなし」と言われたが、咄を効果的に結ぶ「落ち」の技法が確立されるとともに「落としばなし」の名称が定着、近代に入って「落語（らくご）」と音読みされるようになった。一人の演者が、扇子や手拭いその他、わずかな道具を使うだけで、全ての登場人物を演じ分け、季節や場面を髣髴とさせる高度な話芸が育まれたのは、先人たちの長きにわたる丹精のたまものである。

この科目は、「大阪落語」の第一線で活躍する落語家を講師に迎えて、落語の実演をたっぷり聴くとともに「落語の情（優しさと思いやりと）」という観点から、主として大阪を中心に発達を遂げてきた落語の本質と特色について考察する。

● 授業の到達目標

落語の歴史、芸の約束事、周辺芸能との関係、東西落語の比較など、様々な視点を導入することによって「落語」というジャンルへの理解を深め、併せて伝統芸に対する演者の姿勢を知ることにより、現代における落語の意義やあり方について受講者の思索を深めることを目標とする。またそれらを通して、落語にとどまらず、広く大阪の歴史・文化・芸能について考える視座を提供しようとするものである。

● 授業内容・授業計画

① 開講にあたって

科目の趣旨、講義計画、履修の心得、評価のこと、など。

②～⑤ 初級編

まずは、落語とはいかなる芸能かを4回にわたって解説する。落語を演じるときの基本的なルールや、扇子と手拭いの使い方、落語のルーツや現在に至るまでの歴史、そして江戸落語との比較など、様々な角度から大阪落語を分析する。

(テーマ) 落語とは・落語の演じ方・東西落語・落語のルーツなど。

⑥～⑨ 中級編

続く4回は中級編として、長屋の暮らしや、落語に影響を与えた他の芸能、寄席囃子などを取り上げ、昔の大阪や大阪落語の芸に対する理解を深める。(テーマ) 長屋の暮らし・落語と義太夫・落語と大阪の芝居・寄席囃子など。

⑩～⑬ 上級編

最後の4回は上級編として、「落語の情」という観点から、大阪落語の特色について更に深く掘り下げていく。また、寄席への招待として、それまでの授業に増して本格的に落語の実演に接する機会を提供する。(テーマ) 落語の中の男と女・親子の情愛など。

⑭ 終講にあたって

⑮ 授業全体のまとめ、レポート提出

● 事前・事後学習の内容

授業で取り上げるテーマは事前に予告されるので、あらかじめそれについて基本的なことを調べた上で授業に臨むこと。また授業後は、それぞれ授業の中で特に関心を持った事柄について、参考になる文献を探して読み、思索を深めること。

● 評価方法

毎回の授業に対する感想・意見（コミュニケーションカードに記入・提出）と期末のレポートによる（評価の比重は、前者 50%・後者 50%）。ただし、本科目は、出席することに大きな意義があるので、②～⑭の授業のうち 5 回以上欠席した者については、原則として単位を認めない。

● 受講生へのコメント

本科目で取り上げるのは、落語という一伝統芸能であるが、講義で扱われるテーマは、落語の世界にとどまらない広がりを持つものである。各回の講義を一つの契機として、受講者が、落語のみならず、芸能全般、伝統と現代、大阪の歴史と文化等々について、更に考察を発展させていくことを期待したい。

※本科目の設置趣旨から、市民への公開授業としても提供するため、受講者数は 200 名程度とする。

● 教材

テキスト：プリント配布。

参考書：天満天神繁昌亭・上方落語協会編 やまだりよこ著『上方落語家名鑑 第二版』（出版文化社）

豊田善敬編『桂春團治はなしの世界』（東方出版）

DVD「極付十番 三代目 桂春團治」（松竹芸能株式会社）

DVD 繁昌亭らいぶシリーズ 1 桂春之輔「ぜんざい公社」「もう半分」「まめだ」（テイチクエンタテインメント）